

「群萌」あるいは「蝸飛蠕動之類」
—平等で多様な〈弱きいのち〉の連帯へ—

大谷大学 井上尚実

1) 集合的・社会的存在としての人間

大乘仏教は、「生きとし生けるもの」「一切衆生」(sarva sattva)というように、「個」あるいは「種」としての「ヒト」よりもむしろ社会性をもつ群衆(multitude)として人間を捉えるところの特徴がある。中でも浄土教は、現実社会に存在する差別と分断・排除の構造を批判し、多様な生命が等しく尊重され共存するという理念を「浄土」として説き示してきた。阿弥陀仏の本願は、一切衆生がその平等な世界に目覚め、「浄土」を共有するものとなるように働き続けている。本発表では、本願の「十方衆生」という呼びかけが、個人の意識や能力・資質に価値を置く近・現代の人間観を相対化し、その限界を超え出る道を示す重要な意義をもつことを論じたい。

21世紀の世界に再び蔓延している扇動的な自国中心主義、大量移民や経済格差の問題、さまざまな差別の問題の根底には、自己と他者を分別し、不平等を必然として不都合な他者の排除を肯定する人間観がある。釈尊の時代以来、仏教はそうした差別思想を超える道を説いてきた。大乘浄土教は、「群萌」「蝸飛蠕動之類」と呼ばれるような、多数の弱者の苦悩に共感し、その解放を実現する仏の大悲を説く。「多くの人々のために」(bahujanahitāya)、「衆生無辺誓願度」という菩薩の願いは、現代世界に共有されるべき「人間」への眼差しを示している。

2) 仏の大慈大悲を抛り処とする〈弱きいのち〉の連帯

「群萌」「蝸飛蠕動之類」はどちらも、初期漢訳經典において sarva sattva の意識として採用された表現である。「蔓延る雑草」、「群れ飛ぶ羽虫、うじゃうじゃ蠢く虫けらども」というのは、明らかに「無用で厄介な多数者」という否定的価値観を含む暗喩であるが、浄土教はそう呼ばれるような多くの弱き人々の解放を課題としてきた。『大阿弥陀経』の第四願には

諸天人民・蝸飛蠕動の類、我が名字を聞きて慈心せざるはなけん。歡喜踊躍せん者、みな我が国に來生せしむ。(大正 12. 0301b10-12)

と誓われている。親鸞は『教行信証』教巻において、眞実教『大無量寿経』は「凡小」「群萌」のための仏道であることを明言し(大正 83. 0589b08-10)、さらに『唯心鈔文意』では「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」(大正 83. 0707c13-15)と、みずから「瓦礫」に譬えられる「無用で厄介な多数者」の一員として連帯を表明している。

3) 互酬の高次元における回復

いかなる人も差別せず、すべての苦悩する衆生を見捨てない阿弥陀仏の大悲心は、「回向を首として」成就していく(世親『無量寿経憂波提舍願生偈』[大正 26. 0231b23-4])。親鸞は、回向に関する世親・曇鸞の解釈を大切に受けとめ、思想の根幹に据えた。回向とは贈与のあり方であるが、親鸞は、通仏教的な「行者の自力による回向」という考えを逆転して、阿弥陀仏から一切衆生への無限かつ純粋な贈与(「他力回向」)を説いた。贈与の眞の主体は阿弥陀仏であると信知することによって、人間同志の「贈与と返礼」が高次元で回復されるのである(これは柄谷行人が定義する「交換様式D」にあたる。『世界史の構造』第4章「普遍宗教」を参照)。

阿弥陀仏による他力回向は、国家や民族が利己的に傷つけ合う世界、多くの人が苦悩の生活を余儀なくされる社会において、自然な相互扶助の理念を浸透させる働きをもつ。『歎異抄』第四章に記された「念仏して、いそぎ仏になりて」という親鸞の言葉は、自己中心のしかありえない凡夫が「念仏を通して、速やかに仏の大慈大悲心を信受し」、他者のために自然に動き出すという、「群萌」「蝸飛蠕動之類」に開かれた平等な目覚めを語っているのではないだろうか。

【キーワード：十方衆生、sarva sattva、平等な目覚め、互酬】